



時代を拓き 世界に貢献する人を目指して

Global View

2019年12月20日 Newsletter 第64号 仙台白百合学園中学・高等学校 国際教育部

「教皇フランシスコ来日 ～二人の教皇に出会って～」 図書館 佐藤 則子

2019年11月25日、教皇フランシスコ来日にあたり、午前にベルサール半蔵門会議室で行われた「東日本震災被災者との集い」に参加し、午後から「東京ドームミサ」にあずかりました。文字に起こしてしまうにはもったいない、言い尽くせないほどの温かいぬくもりをいただきました。

「東日本大震災の被災者との集い」とは被災者とその支援者だけのプライベートな空間としての集まりでした。司会者からは撮影は教皇着座まで、拍手はしないとの約束がアナウンスされ、教皇フランシスコを祈りと沈黙、子どもたちが奏でる『G線上のアリア』でお迎えしました。被災者代表の3人がその体験を証言しましたが、その内容は会場に集う被災者一人一人が心の奥底でまだ解消できていないものを露わにされ、追体験しているかのような気持ちになる辛いものでした。

津波で園児を亡くした岩手県宮古市の幼稚園園長加藤敏子さんは、「子どもたちの命を守るために最良の選択をしなければいけないことの重さを考え続けています」と現在の心境を、南相馬市の曹洞宗・同慶寺の住職田中徳雲さんは、「便利な時代の恩恵を受けて生活してきたこと、被害者ではあるが、同時に加害者でもあることを自覚し、反省しています。私たちは今、生き方を問われている」と語りました。原発事故で福島県から東京都に避難し、いじめを受けた高校2年の鴨下全生さんの証言は心に刺さる切実な訴えでした。「僕たちが互いの痛みに関心し、再び隣人を愛せるように。残酷な現実であっても目を背けない勇気が与えられるように。力を持つ人たちに悔い改めの勇気が与えられるように。皆でこの被害を乗り越えていけるように。そして、僕らの未来から被ばくの恐怖をなくすため、世界中の人が動き出せるように。どうか共に祈ってください。」この言葉に会場の皆が涙し心をつなげて祈りました。

これに応じて教皇様は、具体的なメッセージを語りました。

「何もしなければ結果はゼロですが、一歩踏み出せば、一歩前に進みます。」

「わたしたちの後に生まれる人々に、どのような世界を残したいですか。何を遺産としたいですか。」

「未来の世代に対して大きな責任があることに気づかなければなりません。」・・・

フランシスコ教皇と近い距離でお会いして、一人の苦しみを個人の問題ではなく世界全体の痛みとして捉える姿を感じました。

38年前の1981年2月24日教皇ヨハネ・パウロ2世のミサに参加した時のこともお伝えしましょう。あの頃はまだ新幹線は開通前、寝台特急で上野に到着。後樂園球場でのミサはみぞれ交じりの雪が舞うとても寒い日でした。指定された座席は教皇様に近いアリーナ席でしたが、野外球場ですからアリーナの芝生は水を含み、歩くたびに冷たい水が靴に入りました。しかし、ミサが始まると雪はおさまりミサ後に教皇様が白いオープンカーで球場内を一周するころには晴れ間さえ見え初めました。ミサはすべて日本語で行われ大変驚きました。教皇ヨハネ・パウロ2世は訪日直前まで日本語を猛特訓されたそうです。隠れキリシタンの地長崎、被爆地広島を強く意識されたメッセージは「私は平和をあなたがたに残し、私の平和をあなたがたに与える」(ヨハネ14・27)。高校生の目に映った教皇様の姿は純白に光り輝き、感動で体が震えていたことを覚えています。

今回の教皇ミサ会場となった東京ドームでは、多国籍の方々が多く見られ、待ち時間の会話、5万人の歓喜の声などあらゆる場所で日本語以外の言語が飛び交っていました。教皇ミサは英語、スペイン語、ベトナム語、韓国語、タガログ語、そして日本語で祈りが捧げられ、その祈りは言語の違いを超えて一つに調和しました。聖歌は会場内を響き合い、木霊のようにまた戻り、そして5万人が満たされました。「すべてのいのちを守るため」というメッセージは、この瞬間、今の日本から世界に向けて発信していることに意味があるのだと思いました。

孤独感や絶望感は誰とも共感できないと感ずることがあります。教皇様は答えの出ない悩みや苦しみを共有するを「私たちは地球の一部であり、環境の一部です。」と示されました。地球全体が家族であり一つの家と考えたなら、社会的な問題やエネルギー問題なども、違う発想で未来へつなげることが出来るでしょう。未来の子どもたちが大人になる姿に希望を託して、大人たちも時代の流れに流されずに目を開いて力強く時代を拓く存在にならなければと思いました。



仙台教区長 平賀徹夫司教様



教皇ミサ開始前(東京ドーム)